

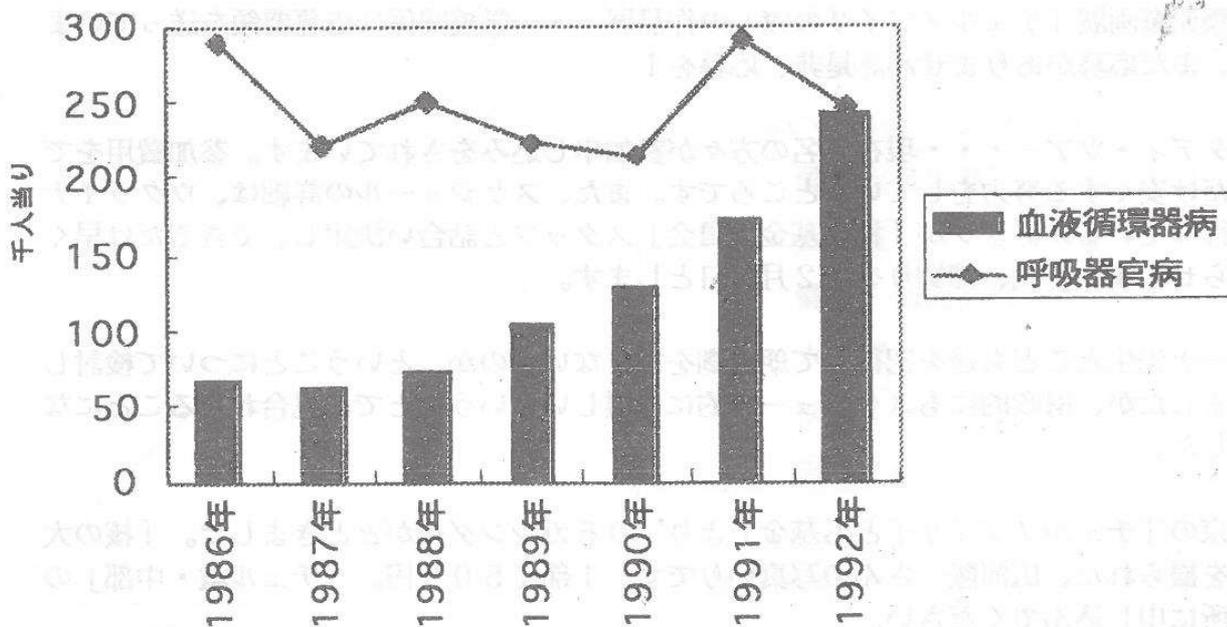
— 汚染地域で働く人々 —

チェルノブイリ原発の事故後、強制移住地域となり一般には無人地帯（現地では閉鎖ゾーンと呼ぶ）と言われているこの地域には、今でも3000世帯の住民がすんでいます（ウクライナ）。政府の移住対策が資金難で進まないからです。またチェルノブイリ原発は現在4基のうち2基が動いており、5500人の人々が3交代で働き首都キエフの電力の40%をまかっています。

そのため、この閉鎖ゾーンを警備する警察や軍隊、絶えず起こる山火事に出動する消防士、村役場など行政機関で働く人々、あるいは原発労働者など、閉鎖ゾーンで働く人々も日夜被曝し続けています。こうした人々（閉鎖ゾーンの職員と呼ばれる）の健康管理はウクライナの軍当局が一括してコンピューターで管理し、分析しています。

今回は発表された論文から、これらの人々の病気の現状の一部を紹介します。ここで働いた人々12500人の殆どが働き盛りの人々です。男性が79%、女性は21%。

汚染地域労働者の病気の推移



心臓病や脳血栓、高血圧などをふくむ血液循環器病が事故（1986年）以後確実に増加し、事故当時の4倍にもなっています。風邪や気管支炎などの呼吸器官の病気はあまり変動がありません。循環器病はいまでは風邪なみに増加し、4人に1人の労働者が苦しんでいます。この中、脳血管病では被爆線量25レム以下を含む全職員平均が1000人当り45人に対し、人数で4.5%をしめる25レム-100レムの人々では1000人に246人と5倍も多くなっています。また、胃潰瘍や胆嚢炎など消化器病も全労働者の40%の人が罹り、25レム以上の人々の1000人に805人がノイローゼなど精神障害に悩まされています。このように、これまで知られなかった放射能の影響が次第に明かになりつつあるのです。

チェルノブイリ救援・中部ではこれらの汚染地域労働者の病院にも医薬品や医療機器を送っています。

(河田)